

〔八倫訓蒙圖彙〕^七厄拂 節分夜にありく、はらいを望者、煎大豆に錢つゝ、みてとらすれば、壽命長久のすいた事をたからかにわめく、只二時計、世上の大豆を打間にめぐる所作なれば、いそがしき事かざりなし、

〔日次紀事〕^{十二月}節分の夜、厄拂をするといふこと有て、男女ともに、厄年にあたりたるものは、身をはらひするなり、同夜、略○中人々、以大豆配紀年之數、與孔方兄數枚、以白紙包之、自摩遍體、則授是於街頭、疫拂受之、高聲唱逐疫詞、而祝之、併爲鷄鳴而去、今夜乞人以綿中覆頭面、自稱疫拂、疫落終夜、往來街衢、至曉而止之、

〔日本歳時記〕^{十二月}世俗に立春の前夜、乞人家々に行て、厄拂ひくゝとよぶ、其翌年厄にあたる歳の人、錢を出して、あたふれば、祝詞をのべ、をはりに鷄の鳴まねをす、京都武城に殊に多し、鄙にもする所多し、

〔俳諧歳時記〕^{十二月}厄祓 厄落 此月に入るより、貧者毎數十人群をなし、神鬼に装ひ、男婦鑼鼓を以、門を巡り、錢を乞ふ、これを打夜胡と名づく、又驅祟の類、夢花録、月十二月廿四日、これを交年といふ、丐者塗抹鬼形に装成し、驅儼ぐゑんと叫跳り、利物を索乞、樂事朝か、れば唐山にも、丐者のやくはらひといふことするとみえたり、厄祓は逐疫也、代醉篇に出、

〔改正月令博物筌〕^{十二月}節分 略○中 厄拂 厄落、中略國によりて、今夕毎家に、社人來りて、祓をする所、厄拂の事、歌にちくらの沖へさらりといふは、素盞烏尊の、千くらの置所に、物をつみて、拂はし給ふ、其千くら置所を、ちくらの沖といふなるべし、祇園けづりかけの夜にも、身の厄を拂はし給ふ、何なるものにて、我身に添ひたる物を、わざと道に落し、歸るなどのならはせ、も同じ心也、

〔秋苑日涉〕^七民間歳節下 立春前一日、謂之節分、略○中 老幼男女、啖豆如歲數、加以一、謂之年豆、街上有驅疫者、兒女以紙包裏年豆及錢一文、與之、則唱祝壽驅邪之辭、去、謂之疫除、ヤクハラヒ

〔塵塚談〕^下厄はらひといふ、非人節分の夜は、御厄はらひが厄拂ひましよとさけび、武家町家を歩